
ムシウタ～夢のその先へ～

紡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ムシウタゝ夢のその先へゝ

【Nコード】

N2902F

【作者名】

紡

【あらすじ】

少年、有馬悠式ありまゆういちは虫憑きとなった。生きるため……生きて夢を叶えるために、悠式は虫憑きと戦っていく。そう、それは最高で最悪のボーイ・ミーツ・ガールズ……。

序章、奪われる夢 1（前書き）

オリジナルな物です。本編主要キャラは一応登場します。

序章、奪われる夢 1

虫。

その異様な存在が囁かれ出したのは、数年ほど前からだったと記憶している。

人間の夢や希望を喰らうという、謎の昆虫　人々はそれを虫と呼んでいる。勿論、俺もそう呼んでいる。

しかし、国は虫の存在を認めていない。だが噂が囁かれた頃と同じくして、目撃証言が増え始めたのは事実だ。

虫は人々の希望や欲求、つまり夢を糧として生きるという噂だ。そのため思春期の少年や少女にとり憑き、宿主の夢を喰らって成長していく。虫にとり憑かれた者は虫憑きと呼ばれ、化け物を宿す人間として怖れられた。

だけど、虫憑きが怖れられる理由はそれだけではない。彼らは自らの夢を喰われる代わりに、虫によって超常の力を与えられる。例えばだが火を噴いたり、空を飛んだり、その能力は多種多様だ。

新しい力を得るとはいえ、虫憑きは万能ではない。自らにとり憑いた虫を殺されると、それらが寄生していた心もまた破壊されてしまうのだ。

虫と道連れに心を壊された虫憑きは欠落者と呼ばれ、感情も記憶もない、他者からの命令を聞くだけの抜け殻と化す。

宿主が虫に夢を喰い尽くされた場合は精神が消滅し、肉体的にも死に果てるのである。

つまり虫憑きになった人間は、必ず虫と心中する運命を決定づけられているのだ。

これらの情報は全て、噂から入手したものだ。しかし、噂は噂で終わらず、現実となった。

「秋月悠弑。君は知つての通り虫憑きだ。大人しく我々に確保されるならば、両手を頭の上に上げて膝をつけ。抵抗、若しくは逃亡す

るのならば、必要に応じて君を傷付ける権利を我々は持っている。
傷付けられなければ、我々に従え」

そう、俺は虫憑きとなった。

「もう一度言う。有馬悠弐、我々に従え」

白いコートを身に纏ったその人物 多分、噂に聞く虫憑きを保護する機関、特別環境保全事務局、通称特環の局員 は、俺にそう言い放った。

「……虫憑きで一番強いやつは誰だ？」

俺は気になったので聞いた。だって、強ければ強いほど、そいつの夢は大きいものだからだ。つまり、最強の虫憑きはどんな夢を持っているのか気になったんだ。

「東中央支部のかっこうだ。しかし、俺は中央本部の局員だ。だから、かっこうに会うことは殆ど皆無だろう」

「……俺は、中央本部に行くのか？」

「そうなるな」

「東中央支部に行くにはどうすればいい？」

「そりゃあ、東のやつらに捕まればいいに決まっている」

「何処で？」

「東のやつらがいるのは桜架市だ。何故それを？」

今度は逆に、男が俺に聞いたきた。

「だって……捕まるなら強い方がいいだろう？」

俺は挑発するよう言った。

「……行きたきゃ行けよ。俺は別に、たまたまお前を見つけたから、たまたま保護しようとしただけだし」

男の反応は、予想と違った。

「……名前は？」

ひとしきのそむ
「仁式望」

仁式は、それだけ言って去っていった。

「かっこう……」

俺は、自分の虫を見ながらそう呟いた。

「もしもし、警察ですが……」

絶望は、一本の電話から始まった。

両親が亡くなった。電話の内容はそれだった。

俺は、小学五年生である妹と共に、絶望に明け暮れた。

しかし、俺はもう十五。俺が……俺が妹を守らねば……。

そう思い……いや、そう心に決めた。幸い、俺の父親は剣道の達人で、剣の腕には自信があった。まあ、剣といっても型は殆ど知らず、結果我流となった。それでも、妹を守る自信はあった。

しかし、妹を守ると誓った日から、妹が行方不明となった。そして、妹の代わりに俺の隣りには虫がいた。

蛸。蟬の仲間であるそれに似ていた。

俺はその虫を見て気付いた。

「俺は、虫憑きになったんだ」と。

守る対象の妹はいない。

俺はどうすれば……。

そう考えていると、中央本部の局員、仁式望と出会った。

仁式は俺を見逃すと同時に、ある情報をくれた。

最強の虫憑き　かつこう。

そいつの居場所を。

俺は、その最強の虫憑きに会うため、桜架市おつかに向かった。

「キミ、不合格」

「どわっ!？」

桜架市に着いた……のは良いが、いきなり黄色い雨ガッパを着た少女に襲われた。しかも、何故かアイスホッケーのスティックを持っている。

「何だねその虫は!。見るからに貧弱そうだ」

「……」

虫……つまり、こいつも虫憑き。俺は直ぐに刀を抜き放ち、戦闘態勢に入る。

「ふふん、日本刀か。そんな武器でボクを倒せるとでも思っているのかね」

……スティックよりはましだと思う。

「早く虫を出したまえ」

「えっ……らそうに!!」

俺は自分の虫を呼ぶ。

問題は無い。自分の虫の能力くらいは把握している。むしろ、この虫は俺の心に寄生したんだ。その俺の心の一部である虫の能力が分からないはずがない。

俺の虫の能力は

「 鳴き声による聴覚への攻撃、七色の羽を広げることによっての視覚への攻撃……。ボクのような戦士には通用しないな」

「なっ!？」

まさか、虫を出ただけで能力がばれるとは。

「ふふん、ボクは虫を出す必要性は無いとみた」

「くっ!」

嘗められている。しかし、悔しい事に俺の虫は弱い。

そう、虫が弱いということは

「俺の夢が……弱い」

ということになる。

「あはっ……弱い？」

俺の夢が？ 俺の想いが？ …… たった一人の肉親を守りたいという気持ち……

「弱い？」

有り得ない。

だから、証明してみせる。この黄色ガツパを倒し、俺の夢が強いという事実を。

「あはっ……キエロ」

俺は虫を消す。この黄色ガツパに、虫は通用しない。ならば、邪魔なものは捨て置くだけだ。

「キミは実に良い具合に、壊れているね」

俺は黄色ガツパに耳を貸さず、跳躍する。

「キミには、戦士になる素質がある」

跳躍したあと、重力に従って刀を振り下ろす。黄色ガツパは動かない。どうやら、真正面から受け止める気らしい。

…… 笑止！！

「あはっ！」

「だからこそ、虫が弱いのは勿体ないねー」

「……っ！！」

しかし、全力の一撃は軽く受け止められた。

「キミ」

そして、そのまま受け流される。俺はバランスを崩し、倒れる。

「 不合格」

倒れた俺に向かって、スティックを振り下ろす。あのスティックが異様な威力を持っているのは知っている。だが

「 殺し合いは、生き残った方が勝ちなんだよ」

俺はスティックに構わず、刀を突出す。

「 ！！」

が、寸前のところで避けられた。

「がつ!!」

頭に鋭いようで鈍い痛み。気が……遠くなる。

「驚いたな。あの場面で諦めないとはねー。……キミ、合格」
薄れつつある意識の中、そんな声が聞こえた気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2902f/>

ムシウタ～夢のその先へ～

2010年10月10日03時10分発行